

「お年寄りとのふれあいを求めて」
支え合い、共に生きる



矢木町 降旗 えつ子

「おはようございます。」
「お元気ですか。」
私の施設での朝の日課は、ご利用者のすべての皆さんへのあいさつから始まります。

八年前、私は悩んでいました。「私は働きたい。けれど、老いた母を一人にしてはおけない。母を看ながら、働くことはできないかな。」
そんな時期に「デイサービス」のあることを知りました。介護保険法によるデイサービス施設を作れば、母を看ながら働くこ

とができる。運よく私の実家が空いていましたので、改造すれば使えます。私はもともと、お年寄りの人と一緒に大家族のような家庭を作り、そこで自分も働き、共に助け合っつて暮らしたいという思いがずっと以前からありました。

事業を立ち上げることは大変でした。福祉の勉強を一からして、資格をとらなければなりません。福祉制度は難しく、分からないことだらけです。知っている人に聞いたり、行政に教えてもらったりしながら、何とか施設を開所することができました。しかし、スタートしてか

ら半年間は大変でした。「何でもこんなことを始めてしまったんだらう」と思いました。施設の運営は何も分かりませんでした。が、このようなときにはいろいろな人に助けられ、支えられました。私の思いである「何としても事業を軌道にのせ、夢を実現したい」この一心を家族・知人・従業員に伝え、全員で励まし合ったり工夫し合ったりして、必死で頑張りました。地道に事業を続け、地域の皆様の応援も追い風になり、利用者数も多くなりました。定員は当初の十名から次第に増加し、また四年前からは二階に泊まりの部屋を設備し、少しでもご本人やご家族の要望に答えられるようにしました。

事業は良い時もあるけれど、波乱の時もあります。苦しい時ほど「どうしてもこれをした」という自分の思い、気持ちを強く念じて事に当たれば、道は開けて、人は助けてくれるものだと信じております。
感謝の気持ちをこめて「ありがとうございます。ありがとうございました」と皆さんに伝えたいです。やがて自分も年をとり、いつかは他人のご厄介になる時期が来るものと思っています。



みんなでお茶を

「石の色は、ニギリで決める。」



東山田第八 鮎澤 秀明

囲碁は世界の共通語

二階の父母の畳部屋に入って、本人たちの口から最初に出た言葉が私を戸惑わせた。「ニギリ? さて、何のことやら。」

私の父がNHKテレビ囲碁番組を見ながら、碁盤に向かっていさやかな楽しみださうとずっと思ってきた。私は五十歳だが、私の周囲の知人にも楽しそうに碁の話をする者はいない。しかし今、碁盤を前にして座っている二人は、二十歳と二十六歳の若者フロリアとジョーダン。しかも フランス人だ。父がにやついた顔で、私の無知を楽しんでいることがわかる。父がこ

んなにも楽しそうな顔を外国から来た若者に見せるのは、本当に久しぶりだ。

実は、我が家には、同じフランスからの留学生がいる。しかし、彼女が家で老夫婦と交流をすることはめったにない。彼女がそのような性格だと言っつてしまえばそれまでなのだが、彼女がフランスで憧れていた日本文化は、カラオケや渋谷のショッピングなど以外に代表されるように、ど興味を示さず、ましてや、田舎の老夫婦との接点など皆無であるかのように思えた。そんなことに心を痛めていた私にとつて、碁好きのフランスからの若者が救世主のように思えた。彼らが碁に興味を持ち始め

たのは、日本とフランス両国で人気を博している漫画、「ヒカルの碁」がきっかけであったようだ。フランスには白と黒の石の世界観にはまってしまった男の子が、数え切れない程いるそうだ。碁トーナメントが頻繁に開催され、ネットの碁サイトで、世界中のマニアと夜な夜な熱戦を繰り広げている。彼らの前回の対戦相手は、米国の碁マニアだったそうだ。

囲碁で歯が立たない父が本当に楽しんだのは、その対局後の彼らとの会話であった。彼らは、父の碁盤と碁石を絶賛した。驚いたことに、その若者二人は憧れの眼差しを向けていた。最後には、その碁石を一つ記念に欲しいと言いつつ始末だ。貝殻でできている碁石なのだそうだ。

次の日、父が毎行く碁練習会があった。その練習会に参加したいがためにもう一泊した二人のフランス人が、父の碁仲間に見つたのを、私の父が自慢げに見ていたことは言うまでもない。
「ヒカルの碁」が繋がったのは、フランスと日本の若者同士ではない。フランスの若者と日本の片田舎に住む年寄りなのだ。彼らが目を輝かせて言うように、「ヒカルの碁」が、本当に世界を一つに繋げてしまうのではなからうか。
(注 ニギリ=碁用語。先番を決める方法)



フロリアンとジョーダン